

【スポーツ健康学科】やんばるの海が教室に！ 学生たちの歓声響くスノーケリング実習

令和7年6月21日、スポーツ健康学科の1年次を対象としたスノーケリング実習が大宜味海岸で行われました。抜けるような青空の下、最初はおそろおそろ海に入っていた学生たちも、上級生の丁寧なサポートですぐに慣れた様子でした。サンゴ礁に集まる色とりどりの魚たちを見つけると、「すごい！」「きれい！」と歓声を上げ、やんばるの海の美しさと大切さを肌で感じていました。



■参加した1年次学生の声



伊藝 修一（スポーツ健康学科1年次、沖縄県・沖縄尚学高校出身）

私は5歳の頃から沖縄で釣りをしていますが、今回スノーケリング実習で実際に水中に入ってみて、透明度の高さにとても驚き、きれいな魚やサンゴ礁を間近に見ることができて、沖縄の海の美しさに改めて感銘を受けました。実習までは座学・プール実習・試験という流れで学習を深めました。試験ではフィンキックが上手にできず補講を受けましたが、先生のご指導のおかげで無事に実習を終了できました。今回の実習を通して、パディワークの大切さ、ルールやマナーを守る大切さも身に付けることが

できました。



永田 心娃（スポーツ健康学科1年次、福岡県立育徳館高校出身）

スノーケリング実習は初めての経験でしたが、プールでの事前練習もあり、安心して海での実習に臨めました。海中では多くの魚を見ることができ、自然の美しさや神秘に心を打たれました。この経験を通じて、マリンスポーツの技術だけでなく健康支援人材としての基礎、特に安全に活動を行うための知識や体調管理の重要性を理解することができました。また、協力の大切さや安全意識の重要性も実感しました。点呼などの基本的な行動が命を守ることにつながるといふ現実にも気づかされました。今後は自分が後輩を支える立場として成長し、来年はチューターとして関わられるよう努力していきたいです。



■ピアサポート学生（先輩学生）の声



全体リーダー（Aグループ担当）

赤嶺 ゆま（スポーツ健康学科4年次、沖縄県立那覇西高校出身）

学生が主体となって計画・準備・運営する実習で、1年生の学びの環境を作り、学びの充実に繋がるよう、多くの時間をかけ丁寧な準備をしました。役割分担や動線の整理などに取り組み、チームのまとめ方や責任の重さに苦戦することも多かったのですが、多くの支援を受けながら、受講生の学びの環境を作れたことはとても良かったと感じています。みんなと実習を作り上げたこと、やってよかったと思える経験ができたこと、多くの支援に心から感謝しています。



全体リーダー（Bグループ担当）

石川 愛海（スポーツ健康学科4年次、茨城県立水戸桜ノ牧高校出身）

今回初めてリーダーを務め、不慣れながらも1年生にとってよりよい実習を目指しました。安全管理と沖縄の海を堪能してもらうことを両立するため、導線やスケジュールを綿密に計画しました。ミーティングを重ねマニュアルを作成することで、学生スタッフが役割を明確に把握し、スムーズな運営に繋がりました。準備段階では雰囲気づくりや役割分担、外部連携に苦労もしましたが、実習当日の1年生の充実した笑顔を見た時、これまでの苦労が報われる大きな喜びを感じました。



スノーケリング班リーダー

寺澤 一心（スポーツ健康学科4年次、東京都立昭和高校出身）

1年次の際は受講生として、その後3年連続でスノーケリング班として参加しました。インストラクターの方々と協力して各班の学生をサポートする役割を担い、情報共有を徹底して全体の流れを把握するよう努めました。これまでの経験を活かし、プール実習や本番では積極的な声掛けを心がけました。参加者全員の安全管理に気を配り、大きな事故やケガもなく実習を終えられたことに大きな達成感を感じています。周囲と協力しながら課題を解決していく重要性を強く実感し、将来に繋がる貴重な経験となりました。



スノーケリング班アシスタントインストラクター

江頭 優（スポーツ健康学科4年次、佐賀県立鳥栖高校出身）

普段からボランティアで海洋教育に取り組んでいるので、サンゴや生物の知識を伝えつつ、インストラクターの方と連携をとり実習が安全かつスムーズに進むよう努めました。1年生から「楽しかった!」という声をたくさん聞いたことで、チューターをやった良かったと思えました。私自身、スノーケリングを通じて多くのことを学び、成長できたと痛感しています。1年生の皆さんも、ぜひ来年は支援側として参加し、新たな学びを得てほしいと思います。



SUP班（Aグループリーダー）

佐野 舞穂（スポーツ健康学科2年次、長野県立木曽青峰高校出身）

1年次の際はただ楽しかった実習でしたが、今回チューターとして参加し、誰かの活動をサポートすることはこんなにも大変なんだと実感しました。サポートには知識や技術だけでなく、状況に応じた判断力や臨機応変な対応など多角的な力が必要であり、自分には足りていないことに気付くことが出来ました。チューター活動はサポートする側としての力を養う貴重な機会だと感じています。



SUP 班 (B グループリーダー)

合田 萌夏 (スポーツ健康学科 2 年次、和歌山県・開智高校出身)

昨年はサポートを受ける側として参加しましたが、今年はチューターとして関わることができ、自分自身の成長を実感しました。事前ミーティングや現地の下見、SUPでの見回りなど、初めての経験が多く大変なこともありましたが、それ以上に多くの学びがありました。先輩方が多くの時間と労力をかけて実習を計画・運営してくださっていたことを、今年実感することができました。貴重な経験をさせていただけたことに感謝し、今後も成長していきたいです。



陸上班 (A グループ担当)

大城 遙幸 (スポーツ健康学科 2 年次、沖縄県立北谷高校出身)

今回、陸上班として参加して、サポートする側でも先輩方にサポートされていることに気づきました。先輩方の丁寧なマニュアルによりサポート側のイメージができ、実習本番では人手が足りないところのサポートなどで臨機応変に行動できたと思います。自分が与えられた役割以上のことをこなすという経験を積んだことは糧になるはずで、今後楽しく実習を続けるためにも、来年のサポート者が増えることを期待します。



陸上班 (B グループ担当)

千原 実桜 (スポーツ健康学科 2 年次、大分県立中津北高校出身)

今回は主に器材の準備や受け渡しと片付けを行いました。初めてサポートする立場になり、1年生の時にサポートして下さった先生や先輩のありがたさを実感しました。実習中は自分にできることを精一杯やろうと、陸上班のメンバーと協力して行動しました。熱中症対策の呼びかけも行き、器材トラブルや大きな事故がなく実習を終えることができ安堵しました。1年生の生き生きとした姿や達成感にあふれた笑顔を見ることができ、実習に携われて本当に良かったと感じました。